病院図書室　14(4):168-174,1994

声・図書委員長に聞く

病院図書室あれこれ

国立大阪病院外科医長
吉川　宣輝

いま私の目の前には「病院図書室」が創刊号から第14巻1号まで並んでいる。この原稿の依頼を受けたとき、国立大阪病院司書の藤本敦子さんが提供してくれた情報である。近畿病院図書室協議会が設立されて20年、本誌の創刊から15年、関係者のご尽力に敬意を表する。自分の勤務する病院以外の図書室を訪れることがほとんどない我々図書委員にとって、本誌は唯一で最大の資料となっている。

国立大阪病院の図書室は図書館と図書閲覧室が別個となっている。図書館は地上2階、地下1階であり、病院の規模としては十分なスペースを持っている。同じ敷地内にあるとはいっても、病院の新築に伴って離島となった。このことから図書閲覧室を管理棟に新設し、従来の図書館は現在では書庫として利用するに止まっている。将来予算や人的な余裕ができれば、図書館をより有効に利用することが可能である。図書閲覧室には最近の医学雑誌と新刊書などが置いてあり、Medline CD-ROM が院長の肝入りで1990年に、医中誌の CD-ROM が最近になってようやく設置されたばかりである。司書は事務部庶務課に所属するいわゆる賃金職員であり、現在では1名に縮小され閲覧室に常駐している。図書費としての正式な国庫金の配分はなく、各種の事務経費から図書購入費を捻出しているようである。年間予算が明白でなく、また人事権もないことから、図書委員会の活動には自ずと制限がある。このように、病院の規模からすると、当院の図書室はソフト面ではなはだ不十分といわざるをえない現状である。このことを承知の上で病院図書室に対する私個人の考えを述べてみたい。

図書室は研修指定病院の条件の一つであり、臨床医といえども学会発表や論文数が評価の対象となった。製薬会社に対する公取委の勧告は、突如として文献検索を不自由なものとした。この2つの大きな環境変化の結果、病院図書室の充実が早急な課題となってきた。一方すべての病院図書室が多くの蔵書を購入、保存することは予算的にもスペース的にも困難であるし、無駄が多い。そのうえ文献相互貸借システムも国内に止まらないようになった。時代はいまや情報に関する流通革命が進行しつつある。これからは「図書の無い病院図書室」が目に浮かぶ。必要な文献が容易にブラウン管で読めるなら、印刷物は要らなくなる。病院図書室にはいくつかのコンピューターと電話とFaxとスライド作成機と座り心地の良い椅子があればよい。印刷物を置くとしても、検索の容易な学術書よりも、医療に関する時事の載った新聞雑誌の方が、病院と社会を結ぶのに有効である。つまり病院図書室は医療・医学の情報室としての役割が重視されるようになるのではなかろうか。

利用者の一人として

大阪逓信病院皮膚科部長
川津　智是

院内の図書委員長として病院図書が今後どのような形になるのが望ましいかを、これまで真剣に考えたことはなく、今回原稿依頼を受け、多少のとまどいと恥しさを感じている。